

間、軍人、高官の両夫人の自害があつて悲報が流れた。食うために男は苦力（労働者）、女は小物品の売り歩き、僅かな収入でその日暮らしの日本人の姿である。

十一月、蒋介石夫人（宋美齡）が入城し、日本人の苦力が清掃している姿を大通で米国官憲とともに巡視された。そして宋美齡夫人から高粱米五合ずつ日本人難民に支給されたのは忘れられない。宋美齡夫人から来春（昭和二十一年）頃は日本へ帰還可能の指示もあった。

くわしいことは知る由もないが、日本人同志が相互扶助を唱え始め、日本人で拠託金を出した人には帰還後日銀からその額の返還が可能ということになり、特に財閥から供託金が寄せられ、私どものような難民生活の糧となり、最後の引き揚げ金一人当たり一千元に限り日本に持ち帰ってもよいというのに無一文だった引揚者の喜びは涙なくして語れない事実である。

あわただしくなった。私は日本帰還団第一大隊長として一千三百人を引率しコロ島を発った。このとき三人は乗船を拒否され気の毒で後ろ髪の引かれる思いをしたが、船で亡くなった方を水葬にして冥福を祈った。

私の長女も満州の地に埋葬して帰った。残念でならない。今度幸せな境地に生まれ変わってくることを念じている。

引揚げ者の体験

山形県 森谷 フサ

私は、昭和十九年十月、縁あって、ハルビン郊外にある防疫給水の特殊部隊に軍属として勤務している主人と結婚しました。

渡満は、輸送のままならなかった当時なので、二十年四月、下関に出張でこられた同僚につれられて、小さい行李一つの荷物をもって、現地についたのは、四月下旬でした。

渡満まもなく、在満東郷国民学校に出るように願われて、五月十日から、勤めました。

部隊関係者の子供だけが入る小さい学校で校長は軍人、ほか数人の教員で運営されていました。右も左もわ

からないまま、ここで一年生を担任、責任を感じながら、家庭と学校の両立に日夜席のあたたまる暇もない生活が始まりました。

一学期も無事に過ぎて、夏休みになりました。北満の拡野に沈む大きい夕日や、短い夏の夜に、遠くはなれた故国を思い、星空の美しさに心をうたれ、自然の豊かさの中で、純真な子供の教育に身をおかれる幸せを感じつつ過ごしていました。ここには、内地のような食糧難も、銃後の護りなどありませんでした。

ところが、八月十日過ぎ、突如として集結命令がでたのです。主人には予知されていたのでしょうか、さしてあわてたようすもなく、「明日〇時まで、家族全員集結だ。」と買物をして、帰ったばかりの私に言うのです。しかも主人とは別行動、このまま長い別れになるかも知れないのです。急に天災地変にあつてすべてを失ったように夢中で荷物をまとめ、前財産を捨てて集結場所に行きました。

「ソ連がはいってくる。部隊が危ない。移動だ。」とあって、家族全員無蓋車にすし詰めされて、「行く先もわ

からないまま南下しました。数両の貨車でした。昼はとまっているときが多く夜になると動きました。

八月十五日、昼時。当時の新京駅のホームはずれの構内に停車し、おかゆ給食をうけていました。おかずもなく、食器は缶詰の空缶という粗末なもの、給食がすんでも車は動こうとしません。ややしばらくたって一人の世話をしてくれていた兵士から、終戦を告げられました。日本が負けたんだと……。

移動を続けていた家族全員は、茫然として内地の方角をみて、涙をながし遙拝しました。

戦が終わわり、部隊移動の必要のなくなった今、この車両は、内地引揚げ車と変わったのです。

悲しいけれど、故国に帰れる嬉しさで皆元気を出すよう励まし合いました。朝鮮を南下する際、日の丸小旗をふって、「私も乗せてくれ、乗せてくれ。」と叫ぶ邦人にすまないなあと泣かされました。

内地上陸は博多でした。寺のような所に收容され、粗末ではありましたが、握り飯をもらいました。私達はおかげで身の危険から救われたのです。ここで県別のグ

ループが作られて、解散、あとは郷里への旅となりました。終戦の詔勅を聞いてまもない引揚げ者第一号だったのです。

山陽本線に乗りました。東窓は遮蔽されて外は見えませんでした。北陸線に乗り換えるために米原におりました。そのとき同じホームに数人のよごれた服を着た軍属がいるのです。近づいてみたら知っている顔、しかもその中に主人もおったのです。本当に偶然でした。互いに目と目をあわせ、無事を確かめました。こうして、私達は九月上旬に、主人と一緒に家に行くことが出来たのです。

思えば、十月に結婚、翌年四月に渡満、九月には引揚げという慌ただしい日月。苦勞のために海を渡り、全財産を失い、ゼロからの再出発となりましたが、私達には、健康と若さがありました。無蓋車に乗せられた家族の中には、暑さと疲労で、うずくまっていたお年寄りもいました。お産して平時なら産じょくにいる体なのに、むくんだ顔で赤ちゃんをだいて、ほんやりと立っている若い婦人もいましたし、途中生命を亡くし、水葬をした方々

もおりました。そして男児三十四人、女児二十五人の私の教え子も無事に両親の故郷に辿りつき、強く生きぬいてくれることを祈りました。

戦争は、この世の地獄です。しかも一番苦しむのは、何も知らない一般庶民なのです。二度とこんな戦は起こらないよう願います。

分村開拓団の崩壊

山形県 飯野 清平

満州事変・支那事変の進行により、国策として満州開拓が推進され、多くの日本人が満州大陸へ渡った。

私達の柏倉門伝村でも分村開拓団が計画され、昭和十五年四月先遣隊の一行、二十八人が故国に別れを告げ渡満した。分村は吉林省盤石県板橙河に作られ、入植戸数六十八戸、入植者は二百九十人にのぼった。だが開拓の夢は敗戦の中で完全に打ち砕かれ、私達は着の身着のまま引き揚げなければならなかった。